

日本ロレンス協会 50 周年記念大会プログラム

- ◎日 時： 2019年6月8日（土）、6月9日（日）
◎会 場： 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎 2階 中会議室
住 所： 〒223-8521 神奈川県横浜市港北区日吉 4-1-1
連絡先： 慶應義塾大学法学部 武藤浩史
Tel: 080-5640-3793
e-mail: animaedicorpo1885@gmail.com

◎交通アクセス： 東急東横線、東急目黒線、横浜市営地下鉄<日吉駅>から徒歩1分

◎昼食のご案内： 土曜日は大学食堂棟の食堂、キャンパス入り口右手の協生館 2階のファカルティラウンジが営業しております。また、日吉駅の駅ビル日吉東急百貨店内、大学から徒歩圏内の周辺にも多くの食事処があります。

◎宿泊のご案内： プログラム最後に宿泊施設をリストにして掲載しました。

【役員会】

- 日 時： 6月8日（土）10:30~12:30
場 所： 慶應義塾大学日吉キャンパス 来往舎 2階 小会議室
※ 昼食を用意します。代金は当日お支払い下さい。

第1日目： 6月8日（土曜日）

- 受 付： 12:30~
総合司会： 武藤 浩史（慶應義塾大学教授）

◎ 開会の辞： 会長 浅井 雅志（京都橘大学名誉教授）（13:00~）

研究発表 (13:05~14:15)

- 司会 橋本 清一（青山学院大学名誉教授）
ロレンスのキリスト教観に対する母の影響——*Sons and Lovers*を中心に
大江 公樹（早稲田大学大学院生）

The Fox における狐の象徴性
田島 健太郎（九州大学大学院生）

50周年特別企画1 基調講演 (14:25~16:55)

ロレンスとモダニズム

- 司会 浅井雅志（京都橘大学名誉教授）
Lawrence and the Aesthetics of Modernism
Michael Bell（ウォリック大学名誉教授）

T.S. Eliot and D.H. Lawrence : 'Towards the Door We Never Opened'

Sean Matthews (ノッティンガム大学准教授)

◎ 総会 (17:00~17:40)

◎ 懇親会 (18:00~20:00)

場所: 大学食堂棟 1階 生協食堂

会費: ¥5,000 (大会当日受付でお支払い下さい。)

第2日目: 6月9日 (日曜日)

研究発表 (10:00~11:10)

司会 新井 英永 (熊本大学教授)

Lady Chatterley's Lover と反知性——「上」を志向するコニー

杉野 久和 (京都大学大学院生)

動的プロセスとしての歓待——D. H. ロレンスにおける「風」のモチーフの再考を通して

井出 達郎 (東北学院大学准教授)

50周年特別企画2 特別講演 (11:20~12:20)

司会 浅井 雅志 (京都橘大学名誉教授)

D. H. Lawrence の伝記資料とその収集

井上 義夫 (一橋大学名誉教授)

50周年特別企画3 シンポジウム (13:10~15:40)

21世紀の文明社会のゆくえ——D・H・ロレンスとノルベルト・エリアス

司会・講師 大平 章 (早稲田大学教授)

文明化と存在論——ロレンスの文明論に関する一考察——

講師 鳥飼 真人 (高知県立大学准教授)

Norbert Elias and Social Identity: Conceiving the Individual, Culture and Society

講師 Julian Manning (日本大学教授)

◎閉会の辞: 副会長 田部井世志子 (北九州市立大学教授)

研究発表

ロレンスのキリスト教観に対する母の影響——*Sons and Lovers*を中心に

大江 公樹

『息子と恋人』は、主人公のポオルが、ミリアム、クララといふ、それぞれ精神的、肉体的充足をもたらす女性との出会いや、母の死を通して、母の支配から逃れてゆく物語である。ポオルの母は熱心な会衆派教徒として描かれてゐるが、敬虔といふ枠に収まりきらない側面もある。例へば、出版に際してエドワード・ガーネットの手が入る前の第四草稿では、物語の前半に、母が親しい会衆派の牧師と、キリストが水をワインに変へたといふカナの婚礼の話について議論をする場面がある。牧師はそこに男女の愛についての象徴的な意味を見出すが、母は婚礼にワインが不足してゐるのを見たキリストが急いでワインを拵へただけだ、と極めて実利的に解釈する。ロレンスは後年『宗教的であること』の中で、神は存在すると言ふ者は、感傷的か誠実かのどちらかで、感傷的である者は聴衆に向かつて「われわれに都合良く計らはう」とほのめかすのだ、と述べている。ここで感傷的と言はれる者の思考は、ポオルの母親の思考と近接する。

ポオルに対する母の宗教面における影響は、これまでも今泉晴子による研究等、幾つかなされてきたが、本発表では、『息子と恋人』に於ける母のキリスト教観が、ポオルだけでなく、後のロレンスの宗教観にどのやうに照射するか、射程を広げて検討したいと思ふ。

The Fox における狐の象徴性

田島 健太郎

1918年に執筆され、加筆を経て1923年に現行版が出版されたロレンスの中編小説 *The Fox* は、同時に刊行された *The Captain's Doll* や *The Ladybird* と同じく、ある特定のモチーフを取り上げて新たな男女の愛の形を模索する作品である。第一次世界大戦の傷跡も生々しいイングランドにおいて農場を共同経営する March と親友 Banford は狐の獣害に悩まされているが、ある時 March は狐と一種の奇妙なコミュニケーションを果たし、無意識のうちに精神を半ば支配されたような状態に陥っていた。そこへ戦地から帰還した青年 Henry が現れ、March は即座に彼を狐と重ね合わせる。この瞬間から狐は Henry の内に潜在する神秘性や残忍さを具象化した存在であると捉えられ、研究者の間で様々な解釈が示されてきたが、その多くは March にとっての Henry の存在を解釈するものであった。だが Henry は狐の持つ何かを仮託される存在でありながら、彼自身も冷酷なハンターであり、物語の中盤では農場に現れた狐を射殺する立場にある。Henry が March と結婚する結末に至るまでの筋書きの上では、狐の射殺は必ずしも必要条件とはならない。それにもかかわらず、ヘンリーは何故狐を撃ったのだろうか。

この発表では以上の疑問に一定の答えを提示することを目標として、*The Fox* における狐の象徴性についての論点を整理し、新たな解釈を加えたい。

『チャタレイ卿夫人の恋人』はコニーが「知性」から脱却する過程を描いた作品である。それにも拘わらず、コニーの不倫関係が特に注目され、「身体」や「接触」に焦点が当てられてきた。しかし、メラーズとの関係にのめり込んだ背景に「反知性」への欲求があったことを見逃してはならない。

作家ロレンスは「知性」を嫌悪する。彼は子どもたちを「知性」へと導く小学校教員を三度勤めたが、皮肉にもこの経験によって知性に対する嫌悪感が増幅する。とりわけ女性の「知性」信奉に懐疑的な姿勢を示す。

女性たちは「知性」を獲得することで社会的な「上昇」に繋がると信じる存在であった。作家の周辺には母親リディアをはじめ知性的な女性が複数存在し、彼女たちは社会的な地位の上昇を夢見ていた。ロレンスの著作においては、上昇しようと「知性」を求める女性たちが厭わしげに描かれる。本作のコニーもそういう人物の一人であり、物理的なレベルでも「上」へ固執する。

本発表では、コニーの「上昇」志向を検証し、反知性という観点による読みの可能性を提示したい。

動的プロセスとしての歓待——D. H. ロレンスにおける「風」のモチーフの再考を通して

井出 達郎

ジャック・デリダのロレンスの詩「蛇」についての論考は、ロレンスの作品の中に「歓待 (hospitality)」というひとつの大きな主題があることを明らかにした。しかしこの歓待という主題は、我々が普段用いている歓待という語のイメージ、特に、家主が来客をもてなすという固定化された「主／客」や「能動／受動」のイメージから見てしまうとき、その主題におけるロレンスの独自性を決定的に見落としてしまうように思われる。詩「蛇」における歓待という出来事は、まず語り手が水飲み場に出向いていくことから始まり、自らの中にある教育的な声との葛藤の中から感得され、その実現は語り手が蛇に棒を投げつけてしまうことで失敗に終わる、という激しい揺れ動きを通して描かれる。そこには、単純な「他者を受け入れる」という静的な構図とはかけ離れた、歓待する側とされる側の双方の変容こそが立ち現れる。すなわちロレンスが提示している歓待という出来事は、受動的な出会いに端を発しながら起こる、そのような動的なプロセスであるといえる。

本発表は、この動的なプロセスとしての歓待のテーマが、ロレンスの作品群——「聖霊」をめぐるエッセイ、詩「風、ならず者」および「生きぬいた男の歌」、小説『アーロンの杖』——で描かれる「風」のモチーフを通して問われていることを提示する。これらの作品群において風のモチーフは、ときに「息」や「音楽」といったモチーフへと変奏されながら、到来するものとの受動的な出会いから始まる歓待という出来事を提示する。それは、固定化された自我や能動的な意志への懐疑とともに、その中にある生に変容を強いる、絶えざる動的プロセスを現出させる。

Lawrence and the Aesthetics of Modernism

Michael Bell

Lawrence shared with his modernist contemporaries ambitious claims for the significance of literary art but within a radically different understanding which turned especially on the significance of the aesthetic. The implications of this theme are progressively expanded in the three sections of this paper. The opening section considers how an influential strain in Anglophone literary modernism set out to counter the ‘emotional slither’ (Ezra Pound) inherited from romanticism. Lawrence by contrast kept faith with the romantic tradition. His emotional understanding was not contaminated by excessive fear of emotionalism. This leads to the second section which considers all of Lawrence’s writing as a ‘poetry of the present’. Lawrence’s concern for the fleeting present entails a different conception of art which has proved very influential as, for example, on subsequent American poets. This leads to the third section which draws upon Joseph North’s *Literary Criticism: a Concise Political History* (2017). North argues that a confused idealising of the aesthetic in modern criticism has deprived it of its critical import and led to its widespread rejection in the literary academy. The Anglophone literary academy, with its origins in the modernist period, now has no common understanding of its activity but practises varieties of uncritical scholarship and ideological critique held in place by the administrative structures of pedagogy. I revisit the origins of the aesthetic in the European eighteenth century to show how it has always had an inbuilt tendency to the idealisation which North has diagnosed. In this context, Lawrence remains a permanently significant model of the critical relation of art to life.

T.S. Eliot and D.H. Lawrence: ‘Towards the Door We Never Opened’

Sean Matthews

Eliot and Lawrence have long been considered as representing the opposed critical, social and intellectual poles of Modernism. F.R. Leavis’s indignant catalogue of Eliot’s attacks on Lawrence established the orthodox position: Eliot was ‘the essential opposition in person’. However, more recent research – drawing on newly accessible materials from the Eliot archives – demonstrates that Eliot’s relationship with Lawrence was far more complex, volatile and intriguing than this orthodoxy allows. Not only is the extent, intensity and acuity of Eliot’s readings of Lawrence overlooked, so also is the pattern of intertextual echoes and references which mark his work, and the uncanny overlap of the two men’s social circles. Bertrand Russell, John Middleton Murry, Richard Aldington and Aldous Huxley were close friends of both men, and they also shared a wide circle of acquaintances which included Ottoline Morrell, Katherine Mansfield, Brigit Patmore, Ezra Pound and others. Exploration of the ways in which Lawrence’s example, his life and writing, perplexes and provokes Eliot reveals new aspects of the modernist structure of feeling, and even leads us to an overwhelming question....

50周年特別企画2 特別講演

D. H. Lawrence の伝記資料とその収集

井上 義夫

D. H. Lawrence の伝記を執筆する際に、調査・参照すべきと思われるものは、**1 第一次資料** 1.1 出生・婚姻・死亡証明書 (Birth, Marriage, Death Certificates) 国勢調査 (Census) パスポート、写真等 教会の記録 学校の業務日誌 給与支払い記録 小縮尺市街地図 1.2 自筆文書 (Autograph) ——書簡、草稿、メモ 1.3 制作絵画、スケッチ等 **2 第二次資料** 2.1 出版された作品と書簡 2.2 家族・友人・知人の書簡・回想 2.3 居住・滞在家屋とその周辺の環境・景観 **3 第三次資料** 何らかの係わりのある著名人の作品・書簡・伝記 に分類される。

本講演でハンドアウトを作って紹介するのは、1) ロレンスの母親とその家族 (the Beardsalls) の婚姻等の証明書、2) 彼らの名の記載された国勢調査記録 3) 彼らが居住した家屋が特定できる市街地図 4) The Saga of Siegmund (*The Trespasser* の初稿) の一部であり、いずれも私が知るかぎり今まで公表されたことがない。併せてその収集過程についてもお話する。

50周年特別企画3 シンポジウム

21世紀の文明社会のゆくえ——D・H・ロレンスとノルベルト・エリアス

大平 章

21世紀が西洋文明に対するイスラム原理主義の挑戦によって幕を開け、早くも20年が経過しようとしている。それは、冷戦後の国際政治における新たな武力衝突の時代の始まりであり、S・ハンティントンの「文明の衝突」という忌まわしい表現によって代表される世界構造であるかもしれない。それと並行してここ数年、グローバリズムや多文化主義の理想に逆行するかのよう、欧米諸国ではいわゆるポピュリズムが台頭し、自国利益の優先や移民排斥を標榜する保守主義によって、人類の歴史は、和合や協調ではなく、再び「不寛容」の時代へと向かっているようである。加えて、文明社会の代名詞である先進科学技術も、環境破壊や地球の温暖化による世界的な気候変動という負の遺産を背負い、21世紀の「黙示録」的予言性を高めている。

こうした文明社会の混沌とした状況は、すでに20世紀初期の世界戦争の時代から続いていたものであり、高度に発達した科学や産業がもたらす未曾有の破壊性をいち早く予言していたロレンスの文学的感性は、そういう意味でも先駆的であり、21世紀においても彼の作品が読み続けられる要因でもある。一方、ユダヤ系ドイツ人の社会学者ノルベルト・エリアスも第一次大戦後のワイマール共和国時代に政治的暴力の渦巻く不安定な時代を過ごし、その後のナチスの台頭によって仏英で亡命生活を余儀なくされ、「文明化」と「非文明化」が表裏一体となる状況を背景に、「文明化の過程」という表現で西洋文明全体の歴史を問い直そうとした。一見すると、ロレンスとエリアスは異質のタイプのように見えるが、このように両者が第一次大戦前後のヨーロッパの「不安の時代」を生き、文明化の人間社会へのさまざまなネガティブな影響を指摘するという点では共通性もあった。本シンポジウムではこうした観点からロレンスとエリアスが見た「ヨーロッパの文明化」の根本的な問題、ひいてはそれが今日もなお、なぜさまざまな学問領域で深刻な議論の対象となるのかという問題に触れてみたい。

今回はロレンスの立場から見た「ヨーロッパの文明化」の問題を彼の歴史論を土台にしながら鳥飼真人氏に、またエリアスの「文明化の過程の理論」が広範囲に応用されてきた理由を社会人類学者であるジュリアン・マニング氏に解説していただくことにする。司会者は両者の議論がうまくかみ合うように、エリアスの伝記的側面、および彼の主著の概要に触れたい。加えて参加者の活発な議論を期待するしだいである。

文明化と存在論——ロレンスの文明論に関する一考察——

鳥飼 真人

「第一次大戦が、伸びゆくヨーロッパ文明の先端を打ち砕いた」という辛辣な文章で始まる「結語」(『ヨーロッパ史の動き』[1921])には、20世紀の変わり目にヨーロッパで起こった急激な「文明化の過程」に対するロレンスの考えが明示されている。ただしその中でヨーロッパ文明を捉えようとするロレンスの姿勢が、一貫して社会科学的、実証主義的であるという見方が全面的に容認されるとは思われない。ロレンスにとって重要なのは、文明化の結実として形成される外在的知識や現象よりも、文明そのものを存在せしめる根本原因や、その発展に不可欠な観念といった、存在論的=形而上学的な要因であると考えられる。20世紀のヨーロッパ文明をめぐる諸問題に対するロレンスの関心は、既に大学時代(1906-08)に高まっていたが、それらの問題と対峙するために彼が存在論=形而上学に傾倒したという事実は見落とせない。このことが、『白孔雀』(1911)の成立に不可欠な要因となり、彼の形而上学は『息子と恋人』(1913)、『トマス・ハーディ研究』(1914)を経て発展の一途をたどり、『虹』(1915)に至って成熟を迎える。本発表では、上記の発展が「結語」におけるロレンスの文明観の形成の前提となっているという考えを、ロレンスの言説と、現代西洋思想に大きな影響を与えた哲学者たちの言説を重ね合わせることによって提示する。この作業を通じて、旧来の観念論とは全く異なるロレンスの「動的な理念=存在論」、それに基づく彼の文明論を現代において考えることの意義を探る。

Norbert Elias and Social Identity: Conceiving the Individual, Culture and Society

Julian Manning

Norbert Elias pioneered an approach to sociology that has had a profound influence on the way scholars attempt to understand humanity and the social groups to which they belong. In this presentation, I will explain how Elias's work presented in three of his works, *The Society of Individuals*, *The Civilizing Process* and *The Symbol Theory*, have helped to shape the way in which contemporary social anthropology understands concepts of individuality, culture and society and the manner in which they are interrelated.

In *The Society of Individuals*, Elias conceives of the individual as a constantly developing product of social processes that are characterized by an 'internal/external dialectic' between the internalized 'self' and the gaze of the 'other'. As such, he should be

recognized, along with scholars such as George Herbert Mead and Erving Goffman as a pioneer of the now widely acknowledged theory of social identity.

In *The Symbol Theory*, Elias makes the case that there is an analogy between the construction of individual identity and the production of meaning in language. In this respect we can understand 'identity' as the 'meaning' of an individual. The individual develops identity as a result of being different from other individuals. What those differences actually mean depends on how others 'read' them.

Identity is continually being re-created as individuals grow and interact with others, learn and internalize ideas about the changing social contexts in which they are living and try to adapt according to how they understand all of this. This is the essence of the internal/external dialectic. Any individual's identity is inseparable from the social context in which that individual lives, hence the term 'social identity'.

In *The Civilizing Process*, he elucidates the development of patterns of behaviour and the belief systems that underpin such patterns, the most famous example being the development of table manners in Europe. Although Elias himself does not say so explicitly, I will argue that what he has done in this work is establish the idea of 'culture' as a behavioural and psychological link between the individual and the social group.

My argument is that the concept of culture provides both psychological and behavioral connections between individuals and the social groups within which they live their lives. As in the Civilizing theory, the concept of culture cannot explain *why* people believe and do the things they do, but by an Eliasian approach to the study of its development, we can understand *how* individuals have come to believe and do the things they do.

However, the concept of culture is itself not without difficulty. In the rest of the presentation, I will describe how the concept has developed historically, at least in its usage in the English language, and how it has been appropriated for political ends by those with specific, nationalistic or ethnically-based political agendas. By seeking to impose versions of cultural norms they believe to represent cultural 'purity' or 'authenticity', such ethno-nationalists are seeking to impose teleological order on the Civilizing Process.

慶應義塾大学日吉キャンパスまでのアクセス

東急東横線、東急目黒線、横浜市営地下鉄グリーンライン<日吉駅>から徒歩1分



新幹線で新横浜駅下車の場合、新横浜駅からJR 横浜線で菊名駅まで2分、菊名駅から東急東横線で日吉駅まで5分(急行)~7分(各駅停車)です。

*東急東横線の特急は日吉駅に停車しません。

日吉キャンパス キャンパスマップ



※ ⑨が来往舎で、中会議室はその2階です。
懇親会場は⑧の1階です。

大会会場周辺ホテル情報

日吉から最も近い、きちんとしたホテルのある駅は武蔵小杉駅（上り方面 2 駅）です。会場へのアクセスという点では、ここでの宿泊をお勧めします。以下、日吉駅から乗り換えなしで行くことができる武蔵小杉駅、新丸子駅（上り方面 3 駅）近辺のホテルと、乗り換えが必要になりますが、日吉から 30 分以内の新横浜駅、大井町駅、蒲田駅近辺のホテルを挙げておきます。

その他、日吉から乗り換えなしで行くことのできる横浜駅周辺や渋谷駅周辺には多数のホテルがあります。

【武蔵小杉駅付近のホテル】

・リッチモンドホテルプレミア武蔵小杉（東急東横線武蔵小杉駅より徒歩 5 分）
住所：川崎市中原区新丸子東 3 丁目 1175-1 TEL：044-430-0076

・スーパーホテル Lohas 武蔵小杉駅前（東急東横線武蔵小杉駅より徒歩 6 分）
住所：川崎市中原区新丸子東 3 丁目 1184-1 TEL：044-578-9000

【新丸子駅付近のホテル】

・川崎グリーンプラザホテル（東急東横線新丸子駅より徒歩 3 分）
住所：川崎市中原区丸子通 1-653 TEL：044-411-1234

【新横浜駅付近のホテル】

・スーパーホテル新横浜（JR 新横浜駅北口から徒歩 3 分）
住所：横浜市港北区新横浜 2-6-20 TEL：045-473-9000

・ダイワロイネットホテル新横浜（JR 新横浜駅正面歩道橋経由徒歩 5 分）
住所：横浜市港北区新横浜 3-17-1 TEL：045-473-4155

・新横浜グレイスホテル（JR 新横浜駅北口から徒歩 1 分）
住所：横浜市港北区新横浜 3-6-15 TEL：045-474-5111

・R&B ホテル新横浜駅前（JR 新横浜駅北口から徒歩 5 分）
住所：横浜市港北区新横浜 2-15-20 TEL：045-478-1717

【大井町駅付近のホテル】

・ヴィアイン東京大井町（東急大井町駅から徒歩 5 分）
住所：東京都品川区大井 4-3-1 TEL：03-5718-5489

・アワーズイン阪急（東急大井町駅から徒歩 3 分）
住所：東京都品川区大井 1-50-5 TEL：03-3775-6121

【蒲田駅付近のホテル】

・西鉄イン蒲田（東急蒲田駅から徒歩 3 分）
住所：東京都大田区西蒲田 7-49-5 TEL：03-3732-5454